

幸もそなた様にやと覺し心ざして、藤房具行兩中納言、師賢の大納言入道手を取かはして、焰の中をまぬかれ出る程の心ち共、夢とだに思ひもわかずいと淺まし、少し延させ給ひてぞ御馬尋出て、君ばかり奉りぬれど、習はぬ山路に御心ちもそこなはれて、誠に危く見えさせ給へば、高間の山といふわたりに、まばし御心ちをためらふ處に、山城國の民にて、深須の太郎入道とかいふ者參り懸りて、案内聞えたるしもいと目醒しう口をし、上達部思ひやるかたなくて、只目を見かはして、如何様にせんとあされたるに、東より上れる大將軍にて、陸奥の國の守貞直といふ大勢にて參れり、今は唯ともかくも宣はすべき様無れば、終にかひなくて敵のために御身を任せぬる様なり、やがて宇治にみゆきあるべきよし奏すれば、御心にもあらでひかされおはします程に、心うしといふものめなり、略君をば宇治へ入たてまつりて、先事のよし六波羅へ聞ゆる程に、一二日御逗留あり、略十月三日、都へ入せ給ふも、思ひしに替りていとすさまじげなる武士ども、衛府の佐の心ちして、御輿近く打圍みたり、鳳輦にはあらぬ綱代輿のあやしきにぞたてまつれる、六波羅の北なる檜皮屋には、元より兩院見、後伏花園春宮殿光おはしませば、南の板屋のいと怪しきに御まつらひなとして、おはしませするもいとをしう忝し、

〔太平記〕天下怪異事

元弘元年略中 八月廿四日、夜ニ入テ大塔宮尊ヨリ竊ニ御使ヲ以テ、主上後醜醜へ申サセ給ヒケルハ、今度東使上洛ノ事、内々承候へバ、皇居ヲ遠國ニ遷シ奉リ、尊雲ヲ死罪ニ行ハン爲ニテ候ナル、今夜急ギ南都ノ方へ御忍候ベシ、城郭イマダ調ハズ、官軍馳參セザル先ニ、凶徒若シ皇居ニ寄來ラバ、御方防ギ戰フニ利ヲ失ヒ候ハンカ、且ハ京都ノ敵ヲ遮リ止ンガ爲、又ハ衆徒ノ心ヲ見ンガ爲ニ、近臣ヲ一人天子ノ號ヲ許サレテ、山門へ上セラレ、臨幸ノ由ヲ披露候ハ、敵軍定テ叡山ニ向テ合戰ヲ致シ候ハンカ、サル程ナラバ衆徒吾山ヲ思フ故ニ、防鬪フニ身命ヲ輕ジ候ベシ、凶